

余市町

安芸遺跡

余市町黒川第一土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007.3

序

余市町は積丹半島の基部に位置し、北は日本海に面し、三方を緩やかな丘陵に囲まれた人口約22,000人の町です。

余市町は気候が比較的温暖なことから海の幸、山の幸にも恵まれ、江戸時代以降はニシンの千石場所として栄えました。この一帯はもともと湿地であり、水田経営が主体でしたが減反政策や宅地化により、この地域を宅地化して整備し、住宅地化に変換を図ることを目的に都市計画道路を決定して幹線道路を軸として道路、公園などの公共施設の整備計画するために余市町黒川第一土地区画整理組合が施工者となって56.9haを平成7年から工事を着手することになりました。

しかし、工事予定地内に埋蔵文化財として登録している安芸遺跡があることから広範囲にわたって試掘調査を行い北海道教育委員会と協議し、道路部分にかぎり平成12・14年度に発掘調査し、縄文時代後期の土器や石器とともに、木製品が出土したことで一躍注目を浴びました。

今回の発掘調査は配石遺構とともに多くの遺物が出土し、縄文時代後期の環状列石が作られていた社会であり、当時の社会や文化を理解する上で重要な遺跡といえます。

このたびの発掘調査には試掘による範囲確認調査から緊急発掘調査に至るまで余市町教育委員会の全面的な協力を頂き、また北海道教育委員会のご指導を賜りました。

ここに感謝を申し上げ、安芸遺跡発掘調査報告書刊行の挨拶といたします。

平成19年3月

余市町黒川第一土地区画整理組合

理事長 篠原了司

本文目次

序	
例言	
第1章 発掘調査の経緯と調査の方法	1
第2章 遺跡の環境と層序	5
第3章 遺構と遺物	9
第4章 包含層出土の遺物	13
(1)土器	13
(2)土製品	14
(3)石器	14
第5章 まとめ	30

図版目次

第1図 遺跡の位置図	1
第2図 土地区画整理事業区域と 発掘調査場所	2
第3図 明治29年の余市地形図	4
第4図 砂丘断面図	5
第5図 遺跡の土層断面図	7
第6図 遺跡の発掘区と自然地形図	8
第7図 配石遺構の平面・断面図	10
第8図 集石遺構の平面・断面図	11
第9図 遺物出土状況	12
第10図 包含層出土の土器(1)	16
第11図 包含層出土の土器(2)	17
第12図 包含層出土の土器(3)	18
第13図 包含層出土の土器(4)	19
第14図 包含層出土の土器(5)	20
第15図 包含層出土の土器(6)	21
第16図 包含層出土の土製品	22
第17図 包含層出土の石器(1)	23
第18図 包含層出土の石器(2)	24
第19図 包含層出土の石器(3)	25
第20図 包含層出土の石器(4)	26

写真目次

写真1 発掘前の状況	35
写真2 低湿地の浸水状況	
低湿地の調査状況	36
写真3 小学生による発掘体験学習	
遺物の出土状況	37
写真4 土層断面・完掘状況	38
写真5 配石遺構	39
写真6 集石遺構	40
写真7 遺物の出土状況(土器・石器)	41
写真8 遺物の出土状況(土器・石器)	42

例 言

- 1、本書は、平成17年度余市町黒川第一十地区画整理事業に伴う安芸遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
- 2、本遺跡は北海道余市町黒川町378-1番地にあり遺跡の登録番号はD-19-19である。
- 3、本書の執筆・編集は乾芳宏が行った。
- 4、発掘調査および整理体制

- ・発掘調査体制 建設水道部長 土門 仁
都市建設課長 池山 徹
土地区画整理推進室長 山本正行
工事指導係長 内藤雅悟
業務推進係長 笹山浩一
余市町黒川第一十地区画整理組合 浜山純子・油木恵子
- ・調査担当者 余市町教育委員会文化財課主幹 乾 芳宏
- ・発掘調査 900㎡
- ・発掘期間 平成17年7月1日～11月19日
- ・整理期間 平成17年11月20日～平成18年6月30日
- ・発掘調査 作業員 見野久幸・湯谷浄治・大森朋恵・田川幸子・水田るり子

- 5、遺物の保管

遺跡から出土した遺物については、余市町教育委員会が保管管理する。

- 6、発掘調査及び整理作業には現地協力をはじめ下記の方々の指導、助言および協力を頂いた。

北海道教育委員会 畑宏明・千葉英一・田才雅彦、北海道埋蔵文化財センター
西田 茂、留萌市教育委員会 福土廣志・高橋勝也、石狩市教育委員会 石橋 孝夫
・工藤 衛、北海道開拓記念館 右代啓祝、小林幸雄・鈴木琢也・添田雄二、常呂町
教育委員会 武田 修、青木延広、佐藤利雄、近藤芳二、仲鉢 浩、原 靖寿
(敬称略)

凡 例

- 1、本書は、遺物において略号及び記号を次のように用いている。

- | | | |
|--------|--------------------|--------------------------|
| (1) 遺物 | 土器 P (Pottery) | 土製品 EP (Earthen Product) |
| | 石器 S (Stone Tools) | 石製品 ST (Stone Product) |
| | 礫 R (Rock Stone) | 木製品 W (Wooden Ware) |

- (2) 遺構

- | | |
|---|------------------|
| 住居 H (House) | 焼土 FP (Fire Pit) |
| フレイク集中 FC (Concentration of flakes and chips) | |

- 2、本書は基本的に次のような縮尺としている。

- | | |
|------|-------------------------------|
| 遺構関係 | 1/50 |
| 遺物関係 | 土器1/3 土製品 1/2 剥片石器 1/2 礫石器1/3 |

なお、それ以外については縮尺を入れて示した。

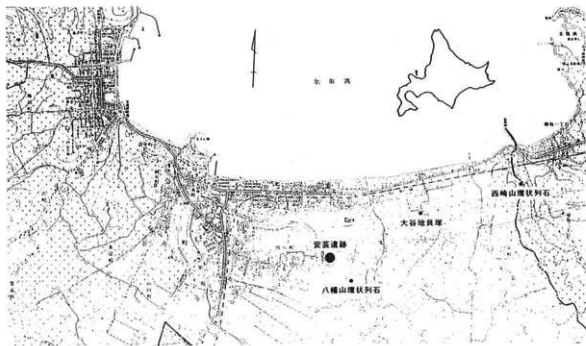
- 3、写真図版の縮尺は任意である。

第1章 発掘調査の経緯と調査の方法

発掘調査の経緯

安芸遺跡は余市市街地から東方約1.5kmに位置し、黒川砂丘上に存在する（第1図）。この地域一帯は湿地であり、水田経営地帯であったが、減反政策や宅地化が進むようになった。余市町ではこのような状況を鑑み、地区の過半を占めている農地を、核家族化による分離家族等を受け入れる良好な住宅地、及び田園環境の調和のとれた広面積の住宅地として整備して住宅地への変換を図ることを目的に都市計画道路決定をし、これらの幹線道路を軸として道路、公園等の公共施設の整備計画をするために余市町黒川第一土地区画整理組合が施工者となって56.9haを平成7年度から16年度を期間として着工することとなった。

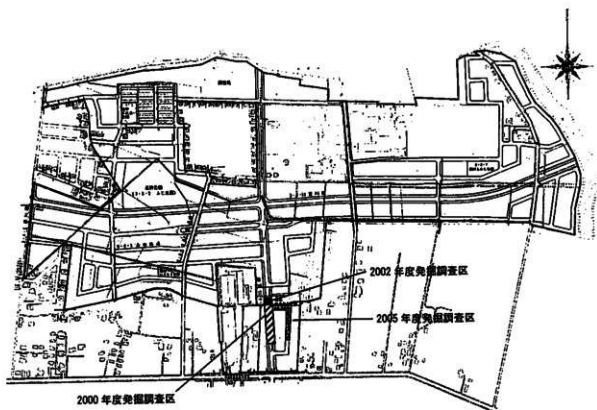
しかし、範囲内には安芸遺跡が登載されていることから、平成12年4月27日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が余市町黒川第一土地区画整理組合から余市町教育委員会に提出された。すでに遺跡の周辺まで工事が進んできているため一時工事を中断し、道教育委員会と協議をし、文化課調査班による道路部分の範囲確認調査が実施することとなった。砂丘部分をはじめ、泥炭地においても多量の遺物が確認されたことから、その状況をもとに文化課調査班と再協議をしたところ、遺跡全体の広がり の把握が必要とのことから区画整理面積の全体について再度範囲確認調査をする事となり6月19～30日の3週間に渡る調



第1図 遺跡の位置図

査を実施した。その調査により縄文時代中期から後期にかけての遺跡が砂丘台地に分布し、北側は湿地または海岸の浅瀬となり遺跡のないことが判明した。その結果、道教育委員会、土地区画整理組合、町教育委員会との三者で協議を行い、遺跡の重要性を認識した上で、低湿地（泥炭地）部分は3mも深さと多量の遺物が含まれていることから保存を重点とした道路の工事設計を変更した橋脚工法とし、砂丘部分のみ発掘調査をすることで話し合いが解決した。その後、組合と町教育委員会は道教育委員会の回答を受けて、砂丘部分については平成12年度に発掘調査を実施している。

保存とした泥炭地部分については平成13年1月からの地質調査を行ない橋梁設計を発注し、9月に北海道教育委員会と協議して承諾を頂いた。それを受けて組合として北海道庁環境課に橋梁工事補助申請を提出したが、道路の安全確保、多額な建設費の関係により国からの承認を得られず、平成14年2月に道教育委員会に経過と事情説明を行ない、発掘調査方法について協議を行ない発掘調査は止むを得ないこととなった。このことから急遽町教育委員会と組合と協議を行ない、委託事業として8月20日～11月22日の期間発掘調査を実施することとなった。さらに事業計画の道路整備のために残り部分の試掘調査を平成16年6月30日～7月1日に行い、道教育委員会から平成16年11月24日付で開発地域全体の事前協議の回答を受けた。その結果、宅地部分以外の道路部分について発掘調査が必要とのことで組合から町教育委員会に調査協力の依頼を受けて平成17年7月1日～11月19日に発掘調査を実施した。



第2図 土地区画整理事業区域と発掘調査位置図

・調査の方法

発掘調査区の北方は低湿地であり、平成14年度に発掘した結果、多量の木製品を含む遺物が確認されたことから東西部分については現状保存として公園化を図ることとなり、南部分の一部低湿地と砂丘部分を今回の発掘調査することとなった。平成16年度の道教育委員会の試掘調査を基として、面積900㎡（南北4.5m、東西20m）、泥炭地の深さ1.5mを基準として積算を立てた。また道路の南側については試掘の結果から工事立会（E～M・17～25）とし必要に応じて工事を停止して発掘調査を実施した。

調査区内の北側の低湿地部分は特に浸透水がひどいために、揚水ポンプを2台使用したが、相次ぐ大雨から推量は減少したものの泥沼状態で調査となった。

調査の方法は平成12年度のグリッドを踏襲し、車道のセンターラインと道路起点600mを5mグリットのC3として両側に10m、2グリットとした。センターラインはC3グリット（X-90719.006 Y46011.197）とC24グリット（X-90829.825 Y46016464）の直線となり全体で南北に2～25、東西にE～Mグリッドを設定した。

遺物の取り上げは、グリット別、層位の記入を行い、遺物としての一括土器が密集している場合にはグリットごとに20分の1図で実測をし、一括に近い土器、完形に近い石器、オリシガネ状土製品、スタンプ状土製品などの特徴のある遺物を主体に行い、主要な遺物は番号をつけて取り上げた。

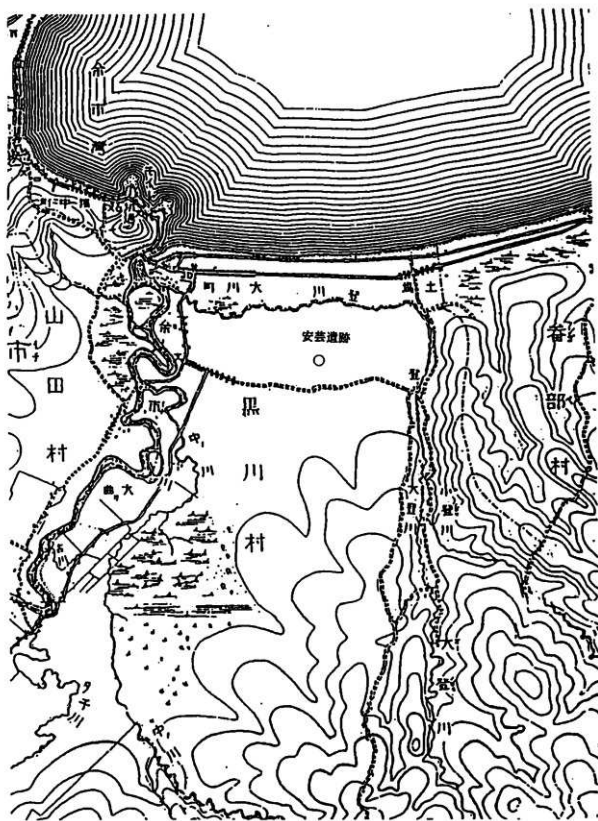
低湿地部分については平成14年に多くの木製品が出土しているために注意深く掘下げたがそのような遺物は確認されなかった。

写真は遺物の出土状況と一括遺物を対象とし、35mmリバーサルフィルムを主体として、補助的にデジタルカメラで撮影をした。

整理作業は遺跡から離れている沢町に所在する町指定文化財の旧今邸宅（町教育委員会所管）を事務所として平成17年10月～平成18年6月まで行った。

遺物の洗浄は悪天候の日と発掘終了後に行い、トラックで遺物を整理事務所に運搬し、注記作業を行った。注記作業と並行して一括遺物を主に接合作業を行い、復元土器については実測を行い、土器破片については口縁部や胴部で特徴あるものを選定して拓本をとることにした。実測に当たっては、大量の遺物を短期間で実測しなければならないために、従来どおりの三角定規を利用しての実測と併用して、テレビ画像を通しての機械実測機を導入して迅速化を図った。

これら整理された遺物については余市町教育委員会で保管し、余市水産博物館での展示や教育普及活動を通して文化財への理解を図ってきたい。



第3圖 明治29年の余市地形圖

第2章 遺跡の環境と層序

1. 環境について

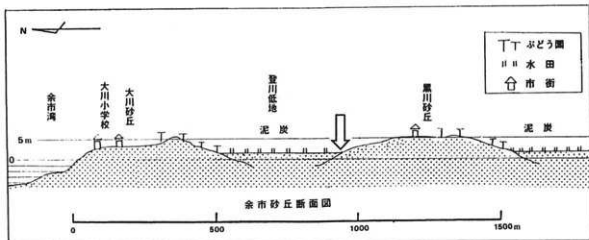
余市川河口から大浜中海岸を経てフゴッベ岬付近までの4.5kmは緩やかな弧状を描く砂浜となっており、この砂地は古い余市湾の入口に生成された砂州、又は砂嘴から発達したと考えられる砂丘である。余市平野の北部海岸に沿って築かれたこの標高4～6m、幅400～500mの堤防のようにになっている砂浜は大川砂丘と呼ばれている。

大川砂丘の内陸側（南側）には同型の砂丘が並行して存在しており、黒川砂丘と呼ばれている。黒川砂丘は旧八幡神社の丘下付近から西端はニッカウキスキー工場付近まで続き長さ約3km、標高4～6m、幅は400～500mとなっている。この地下構造について西端付近の海面下約15mの砂層中にアサリの貝殻、さらにその下層、海面下約25mの砂礫層中にもアサリの貝殻が発見されていることから、地下に海成堆積物が存在し海底であったことが知られている。

この大川砂丘と黒川砂丘に挟まれた低湿地は登川低地と呼ばれ、登川が大川砂丘に出口をはばまれ、西に流れて余市川と合流している。この低地は泥炭地が発達しており、周囲より若干低く、排水の悪い地形となっている。

この地域は大川砂丘と黒川砂丘の間にとり残された海跡の潟湖が存在した場所で、次第に淡水化し、更に登川の運搬する土砂のために埋積されて、遂に沼沢地となり泥炭の生成に至り現在の姿になったと考えられている。

安芸遺跡は黒川砂丘から登川低地にかけて立地しており、遺跡の発見は昭和38年に土地改良の際に円礫の配石が出土したことによるもので、峰山巖氏を中心として調査をしているが、報告書の刊行が無く詳細は不明のままである。



第4図 砂丘断面図

平成12年度の発掘調査区は砂丘の縁辺に位置するもので、表土から50cmほどで基盤となる砂層面（IV層）に達し、縄文時代中期後半から後期後半の遺物が出土し、遺構として竪穴住居跡2軒、土坑13基、炉跡19ヶ所が発見されており、今年度の発掘調査区は、平成12年度発掘調査区の東側に位置する水際周辺部である。

安芸遺跡の周辺には、黒川砂丘上東方に縄文時代中期～後期を主体とする国指定史跡「大谷地貝塚」、南方の丘陵台地には八幡山環状列石、東方の丘陵台地には道指定史跡「西崎山環状列石」などの縄文時代後期の遺跡が位置している（第1図）。

2. 基本層序について

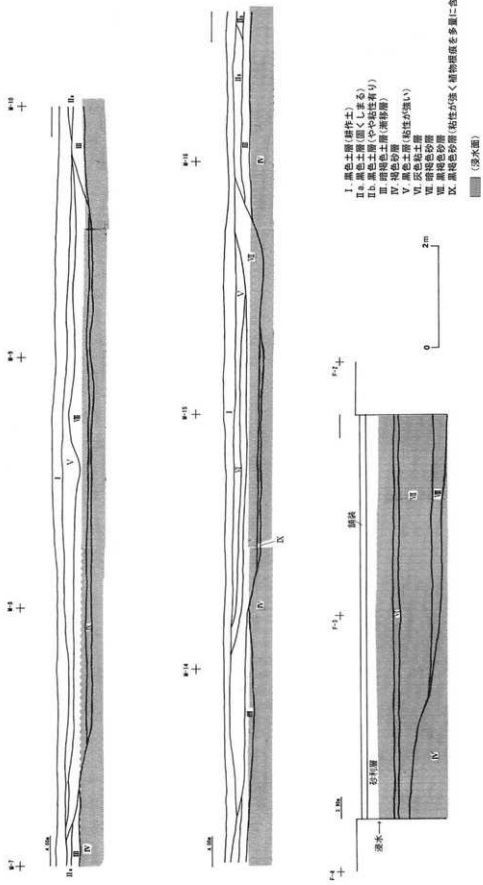
今回の調査区は登川低地と呼ばれる位置にあたる。基本層序は平成12年度調査においてⅠ～Ⅳを基本層序として使用しており、今年度調査はその継続部分ということで、Ⅴ層から使用したことをご理解いただきたい。

詳細は以下のとおりである（第5図）。

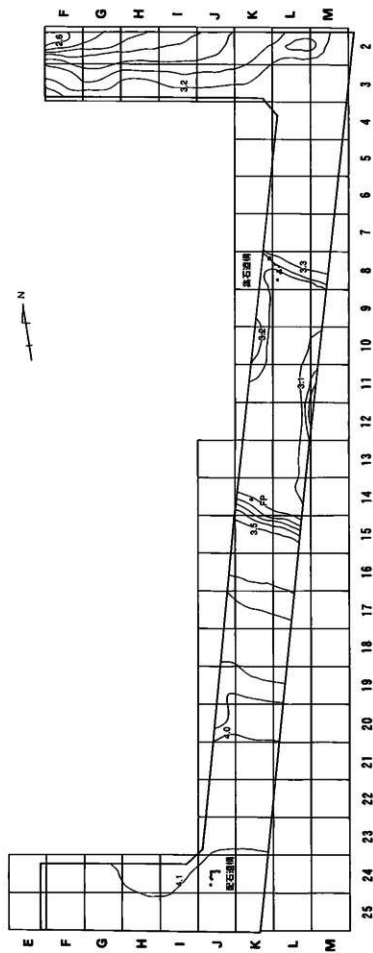
- | | | |
|-------|-------|---|
| Ⅰ層 | 黒色土層 | 表土及び耕作土で厚さ約20cmを測る。 |
| Ⅱ a 層 | 黒色土層 | 縄文時代の遺物包含層で、固くしまり、厚さ約10cmを測る。 |
| b 層 | 黒色土層 | 縄文時代の遺物包含層で、やや粘性を帯び、厚さ約10cmを測る。 |
| Ⅲ層 | 暗褐色土層 | 漸移層で縄文時代の遺物包含層で、厚さ約10cmを測る。 |
| Ⅳ層 | 褐色砂層 | 黒川砂丘の基盤層であり、上面は固くしまる。上面から縄文時代中期末の遺物が若干出土する。 |
| Ⅴ層 | 黒色土層 | くぼ地に堆積したもので、粘性を帯び、遺物の出土は無い。 |
| Ⅵ層 | 灰色粘土層 | くぼ地に堆積したもので、遺物の出土は無い。 |
| Ⅶ層 | 暗褐色砂層 | 縄文時代の遺物包含層で、湧水により浸水する。厚さ約30cmを測る。 |
| Ⅷ層 | 黒褐色砂層 | 縄文時代の遺物包含層で湿地の下部に堆積した泥炭と混在している。浸水している状態であり厚さ約20cmを測る。 |
| Ⅸ層 | 黒褐色砂層 | 縄文時代の遺物包含層で、湧水により浸水する。下部に堆積し泥炭と混在しており、粘性が強く植物根痕を多量に含んでいる。浸水している状態であり厚さ約10cmを測る。 |

遺物包含層はⅡ～Ⅸ層までであり、縄文時代中期後半から後期後半の遺物が出土している。層序毎の大まかな出土土器型式については、Ⅱ・Ⅲ層及びⅤ～Ⅸ層にかけて縄文時代後期前半～後半の手稲式・ホッケマ式土器前後の遺物、Ⅲ層下部～Ⅳ層上部にかけて縄文時代中期～後期前半の余市式や手稲式などが多く出土する傾向が見られる。

南北セクション



第5図 遺跡の土層断面図



第6図 安芸郡の地形図と自然地形図

第3章 遺構と遺物

発掘調査により配石遺構1基、焼土1カ所、集石遺構1ヶ所が確認された。遺構の確認はⅡ層中であり、伴出する遺物は確認されなかった。自然地形からこの遺跡の北側は低湿地の岸部分となり、中央部分に浅い湿地が見られ平地部分は砂丘となっている。南側は現在より30cmほど高くなっていたと思われ、耕作による削平が著しい。完掘した状態でⅣ層上面を精査した状態で多数の不定形の褐色土が見られたために、それぞれを掘り進めたがいずれも自然の窪みや木痕と確認された。

1、遺構

(1) 配石遺構 (第6・7図・写真5)

J-24グリッドにおいて大形で長めの自然礫(安山岩)の配石が認められた。

この地点は表土から25cmと浅く、耕作によりⅢ層まで削平が行われている。そのために配石の多くは当初の位置から動かされ、一部は消失している可能性が高い。配石は南北に約2.5m、東西に約1.5mの範囲であり、南東及び南側には配石は見当たらない。

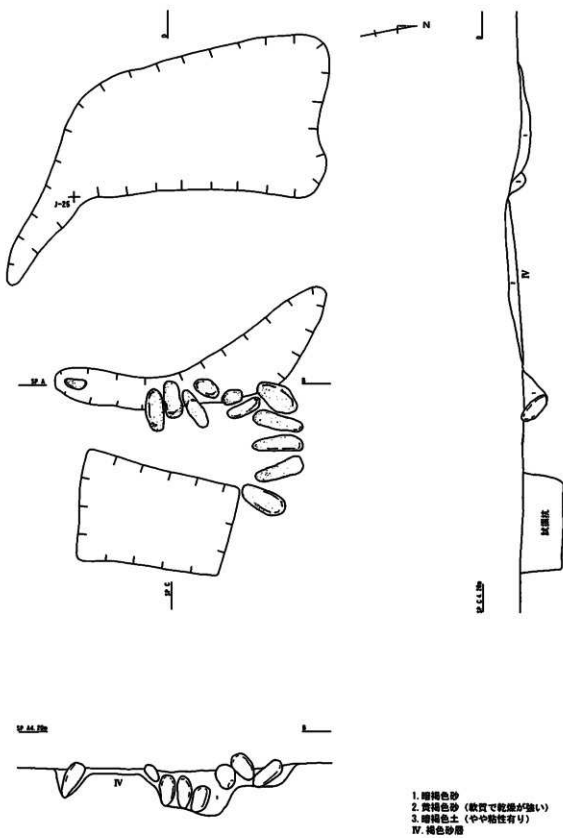
配石は全部で12個であり、いずれも長方形で30cmほどの大形の礫を利用しており、くの字状に配列されている。配石の西部分はⅣ層下に黒色土が入り込んでおり、風倒木と思われる擾乱から礫が動かされており、また北側は深く耕作を受けていることから倒石したものと考えられる。当時の配石としてはⅡ層を生活面であることからⅢ層上面まで掘り込んで立石としていたものと考えられる。配石の下部および周辺には特に土坑の痕跡は見当たらない。東部分は平成14年度に範囲確認調査をした時の試掘坑であり、その際には礫の出土はないので、もともとこの箇所には礫が無かったと考えられる。遺構に伴う遺物は発見されていないが、遺跡全体として縄文時代後期の第Ⅳ群土器であるホッケマ式の小破片が散在することからその時期前後に相当すると思われる。

(2) 焼土 (第6・9図)

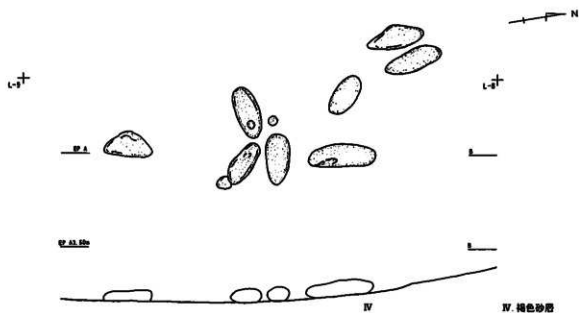
K-14～K-8グリッドにかけて浅い湿地が見られ、南側の緩やかな傾斜地のK-14グリッドに焼土(FP)が認められた。長軸50cm×短軸25cm×深さ8cmを測り、炭化物粒子と骨片が含まれている。この湿地部分に多くの遺物が集中して見られる傾向がある。特に遺構に伴う遺物はないが周辺の土器型式から第Ⅳ群土器のホッケマ式前後と思われる。

(3) フレイク集中 (第9・18図)

K-14グリッドⅣ層上面において直径30cmほどの範囲に黒曜石のコア(石核)、フレイク(剥片)、チップ(屑片)が集中して出土した。この地点から北側に上述した焼土が確認されていることから関連する可能性がある。これらの遺物について第18図 No. 50～54にその



第7図 配石遺構の平面・断面図

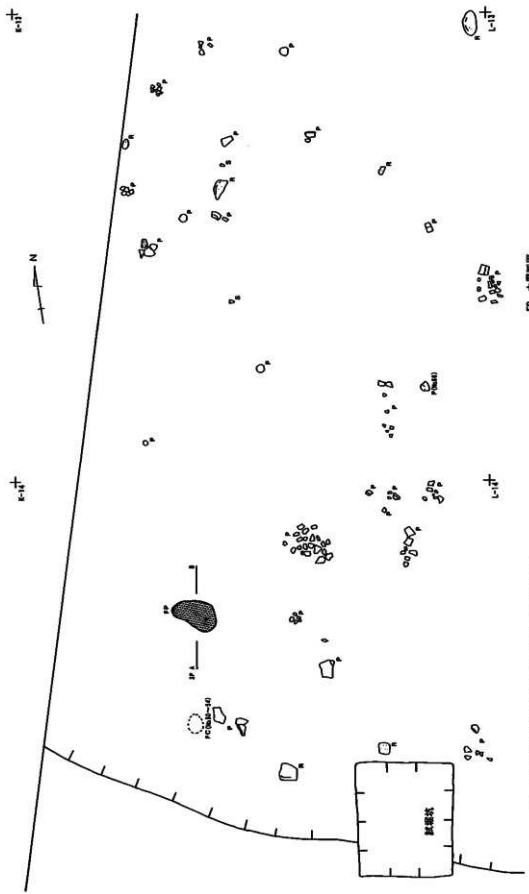


第8図 集石遺構の平面・断面図

一部を図示したように自然面を残す角張った黒曜石で小形のものが多い。原石の打点を変えながら剥片を作出している。

(3) 集石遺構 (第6・8図)

K-14~K-8 グリッドにかけて浅い湿地が見られ、その南向きの緩やかな斜面 L-8 グリッドに8個の大形礫が見られた。長さ約40~70cm、重さ5~20kgの大型で長めの自然礫(安山岩)であり、配石遺構とするには特に規則性がなく緩やかな傾斜地に礫を置いた状態、または投げ込んだという状態である。この礫の一部には凹石、擦石、台石として使用されているものも含まれており廃棄した可能性がある。集石の時期であるが周辺の出土遺物から第IV群土器のホッケマ式と関連すると思われる。



フレイク集中 (Concentration of flakes and chips)
 P 土器 (Pottery)
 S 石器 (Stone tool)
 R 石 (Rock stone)
 FP 燧土 (Fire Pit)

1. 暗褐色砂 (褐色物粒子を含む)
 2. 燧土 (骨片を含む)



第9図 遺物出土状況

第4章 包含層出土の遺物

包含層出土の遺物量はコンテナにおいて30箱程度であり、Ⅱ～Ⅳ層上面及び低湿地部分に多く出土している。

遺物の出土状況については低湿地部分に密集しており、多く遺物が廃棄されている状況であるために完形となる土器は少なく、縄文時代後期と思われる遺物の大半を占めている。石器については尖頭器が主体となり生活の全般に使用される器種が揃っているが、遺構と思われる痕跡はなく集落の外縁地域と思われる。土製品としては後期に流行したと思われるスタンプ状土製品、オロシガネ状土製品が出土している。

なお、以下に遺物の説明をするが個々の計測については一覧表を参照していただきたい。

(1) 土器 (第10～15図)

・第Ⅰ群土器 (No. 16・58)

縄文時代中期後半の所産で口縁部に肥厚帯をもち、突縮文(0→1)を有するもので北筒式系に属するものである。器厚は厚く平底で筒形を呈している。地文は斜行縄文であり、胴部及び内面に結節文も見られる。

・第Ⅱ群土器 (No. 17～20)

縄文時代中期後半から後期初頭の所産と思われる、粘土紐を口縁部から胴部にかけて平行に貼付文を有する余市式に属するものである。器厚は厚く平底で筒形を呈している。口縁部は折り返し口縁が多く、貼り付け部分にも縄文を施している。

・第Ⅲ群土器 (No. 1・21)

縄文時代後期初頭所産と思われる、口縁部に粘土により貼瘤に刺突を施し、沈線による波形文が見られる。

・第Ⅳ群土器

縄文時代後期前半から後半の所産のもので磨消縄文を多用するもので船泊上層式、手桶式、ホッケマ式に属するものである。

a 類 (No. 30)

口縁は平、波状で深鉢(朝顔形)、浅鉢などがあり、口唇断面は丸・角形を呈し太い平行沈線に縦の曲線で繋ぐものが見られる。地文の縄文は原体L・Rの場合が多い。

b 類 (No. 2・3・23～29)

口縁は平、波状で屈曲をもつ深鉢が特徴的となり、浅鉢は直線的なものである。口唇断面は角形となり、口縁部に幅広の無文帯をもち、屈曲部分に刻状の列点を一周させるものもある。太い横走沈線で胴部と区分けしている。地文の縄文は原体L・Rの場合が多い。

c 類 (No. 42~57)

口縁は平、波状で屈曲をもつ深鉢が特徴的となり、浅鉢は直線的なものである。口唇断面は角形となり、口縁部及び屈曲部分に刻状の細長の列点を一周させている。太い沈線による曲線を描くもので地文の縄文は原体RLとLRを組み合わせて羽状風に見せる場合が多い。口唇断面は丸形、角形、やや内切の尖り気味のものが有り、頸部から口縁にかけてわずかに内湾する傾向がある。

d 類 (No. 35~40)

口縁は平、波状で屈曲をもつ深鉢が特徴的となるもので、c 類と同様の器形と思われる。口縁部は斜行または羽状縄文を地文とし、口縁直下に刻状の列点を1~2段を一周させるものもある。

e 類 (No. 12・13・15)

粘土紐による貼付が見られるもので、壺、注口形などの特定の器種であり、粘土による貼瘤が見られるものもある。

f 類 (No. 32~34)

口縁は平、波状で深鉢、浅鉢などがあり、口唇断面は丸・角形を呈し、地文が斜行縄文だけのものである。原体LRとRLの組み合わせがあり、a~e 類に伴うものである。

(2) 土製品 (第16図)

・スタンプ状土製品 (No. 6~8)

長さは3cm前後で底面に沈線により文様が施されている。No. 6はつまみ部分に貫通孔があり紐などを通していたと思われる。No. 7・8は底面が円形を呈し円形または無文となっている。後者は古い要素をもっており、いずれも縄文時代後期の第IV群土器に伴うものと思われる。

・オロシガネ状土製品 (No. 1~4)

円盤形の扁平な土製品である。2種類の形態があり、円形と楕円形に2ヶ所の突起を有するものである。文様は平行沈線を数状配し列点文を全面に施し、皿状であることで共通している。この土製品については以前の発掘調査でも出土しており縄文時代後期の第IV群土器に伴うものと思われる。

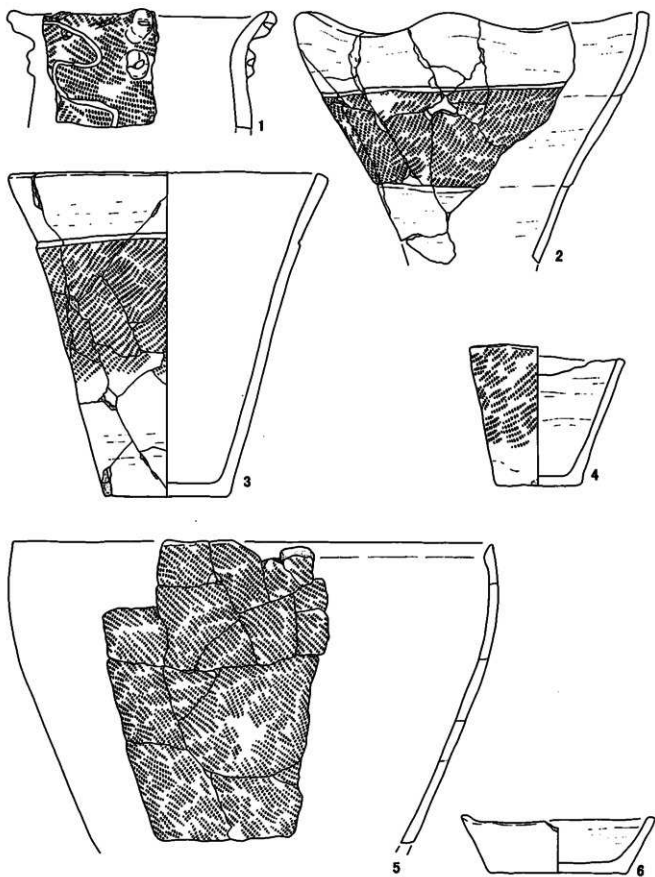
(3) 石器 (第17~20図)

当遺跡から出土石器類の大半は図示し、他については剥片類が圧倒的に多い。

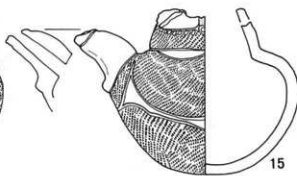
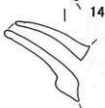
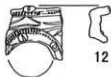
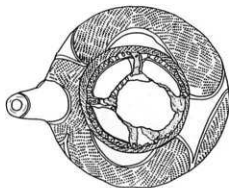
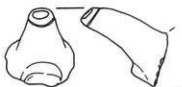
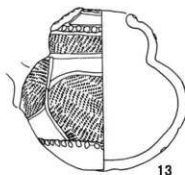
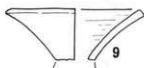
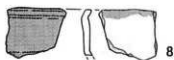
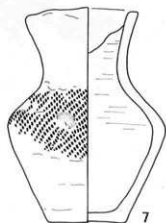
・石 鏃 (No. 1~25)

5cm未満で有茎のものと無茎のものがある。石質として黒曜石、チャート素材することが多い。

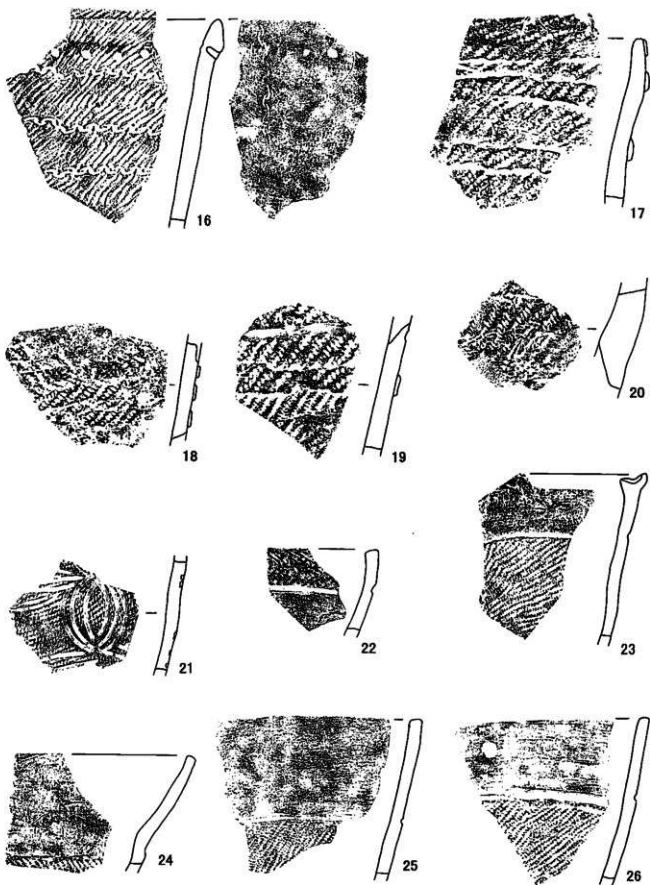
- ・石 槍 (No. 26～30)
便宜的に5 cm以上のもので柳葉形、舌状の茎を持つものがある。石質として黒曜石、頁岩、チャートを利用とすることが多い。
- ・削搔器・スクレイパー (No. 31～45)
剥片の縁辺に鈍角な刃部を作出しているものである。No. 37～40はつまみ付きナイフ、石匙とも呼ばれているもので縦長剥片を利用し刃部を作出しているものである。石質として黒曜石、頁岩を利用とすることが多い。
- ・石 錐・ドリル (No. 46～49)
先端に厚みを持つもので棒状のもの、つまみをもつものがある。石質として黒曜石、頁岩を利用とすることが多い。
- ・北海道式石冠 (No. 56)
自然礫を王冠のように加工したもので、握り部分を作り出している擦石である。底面には全体に擦面であるが敲打痕も見られ、石質として安山岩を利用している。縄文時代中期から後期前半の第1・2群土器に伴うものと思われる。
- ・石 斧 (No. 57～62)
磨製及び局部磨製と言えるもので、刃部は両刃のものである。製作として自然礫の研磨、叩打の後の研磨があり一部には擦り切り痕を残すものがある (No. 60)。全体として小型であることから楔として使用されたことも推定される。石質として泥岩、ハンレイ岩を利用とすることが多い。
- ・砥 石 (No. 66・67)
扁平な自然礫を使用しており、両面に擦痕が残されている。石質として安山岩、泥岩を利用している。
- ・敲 石 (No. 68～75)
自然礫の一部及び全体を擦っており、礫面の一部分に敲打痕が見られる。主に扁平な拳大の自然礫を使用しており、石質として安山岩、泥岩を利用している。敲石は石皿・台石とともに使用されることが多いことから、集石遺構の大形礫とともに使用されていた可能性がある。
- ・石 棒 (No. 63～65)
J-3 グリッドで出土した石棒は接近して割れた状態出土している。No. 64は接合部分の割れ口および基部が摩滅していることから破損のまま長期に使用されて廃棄したものと思われる。他は小破片であり全体の形態を知ることはできない。石質として粘板岩を利用している。



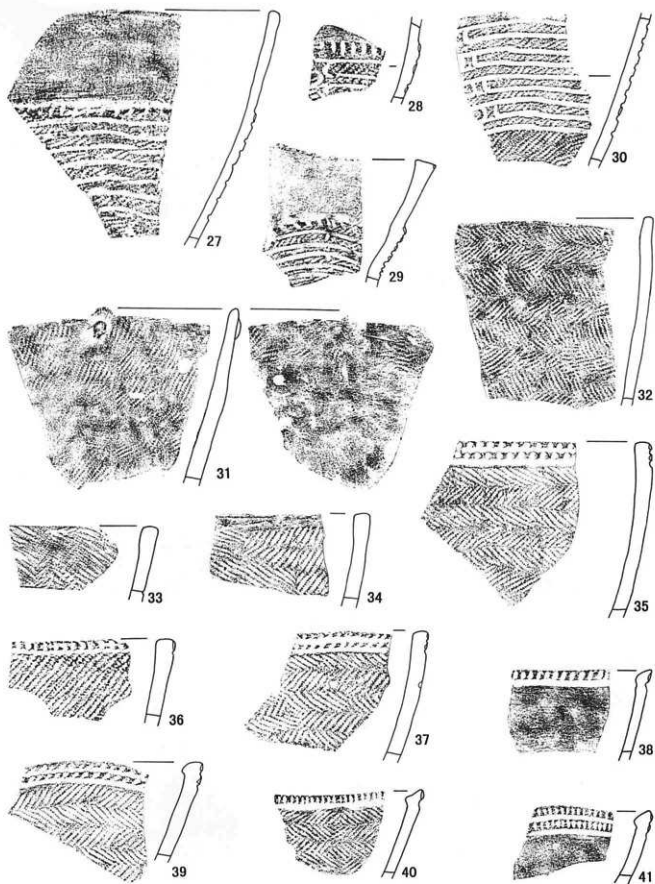
第10図 包含層出土の土器(1)



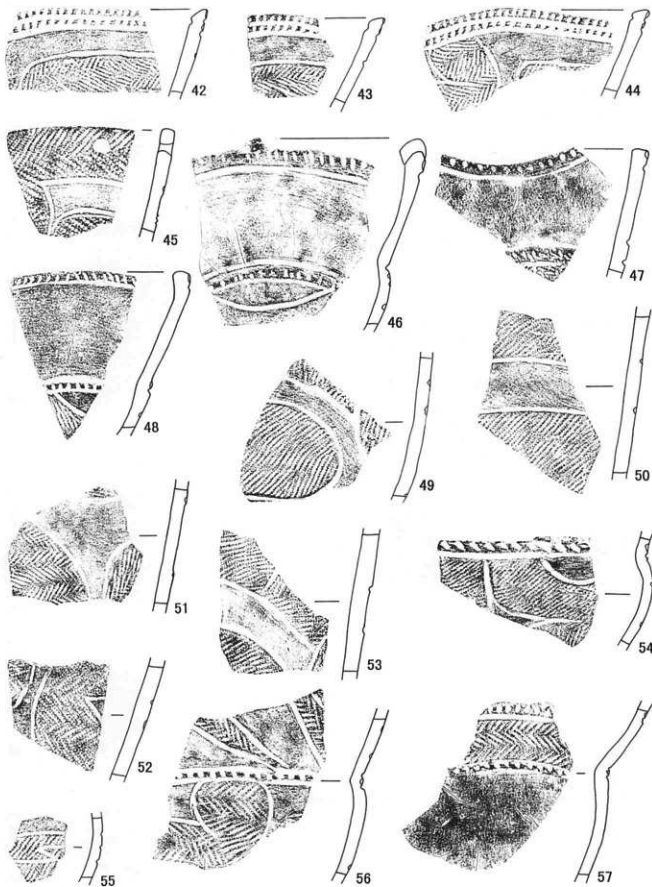
第11図 包含層出土の土器（2）



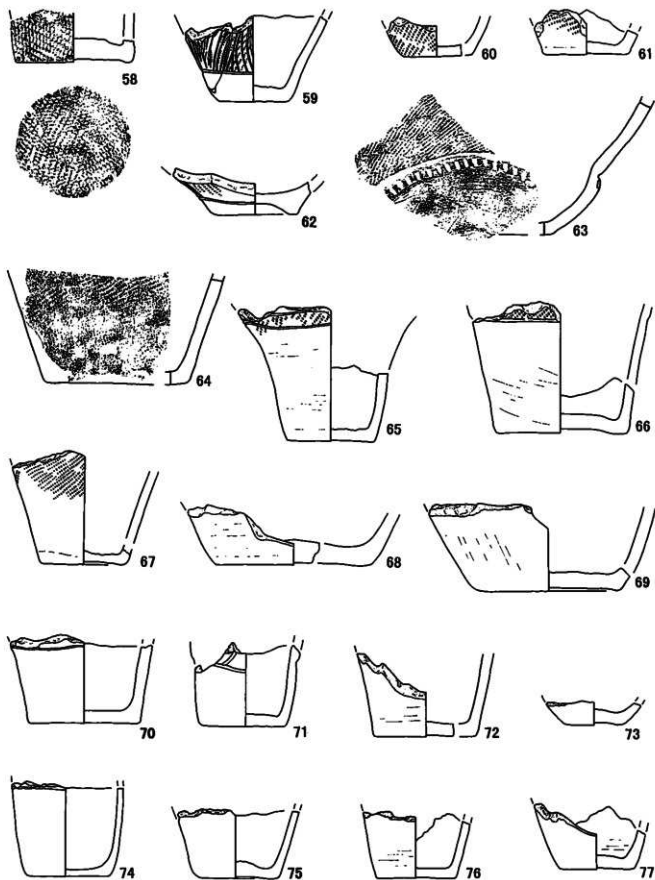
第12図 包含層出土の土器 (3)



第13図 包含層出土の土器(4)



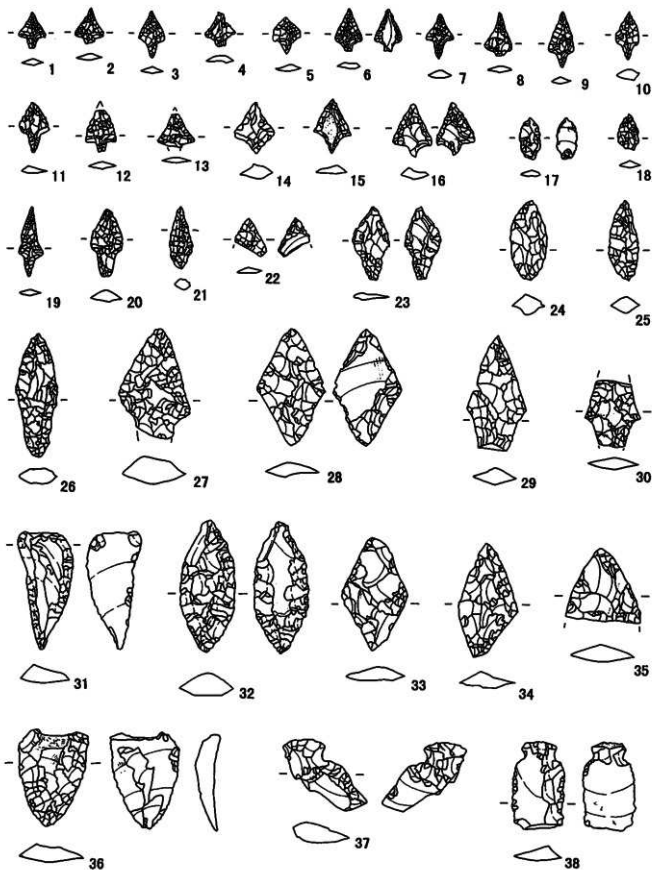
第14図 包含層出土の土器 (5)



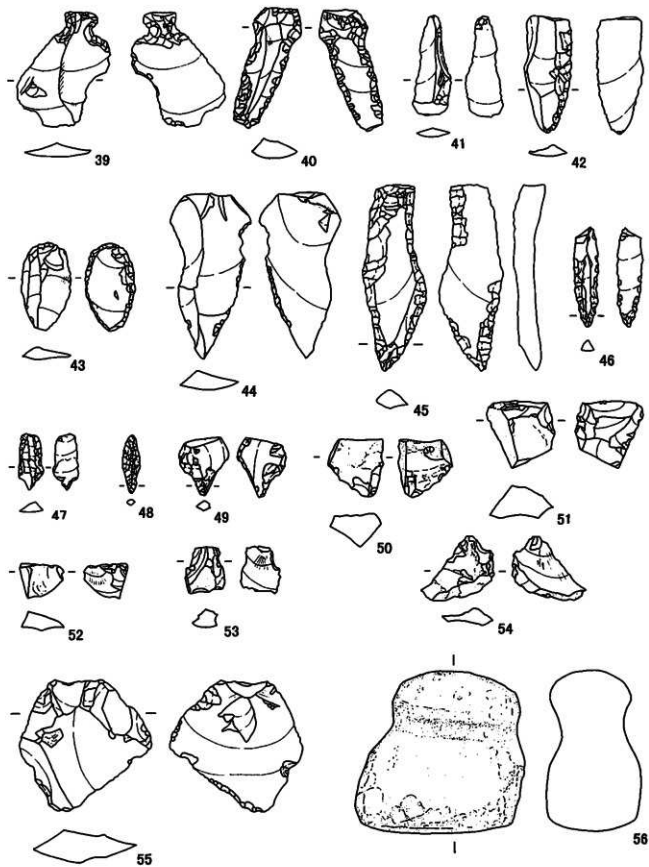
第15図 包含層出土の土器(6)



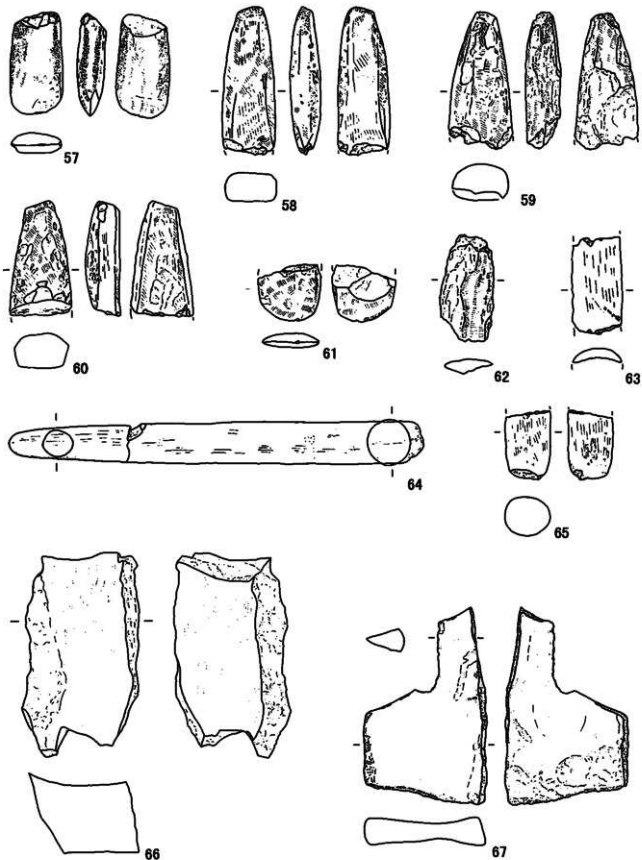
第16図 包含層出土の土製品



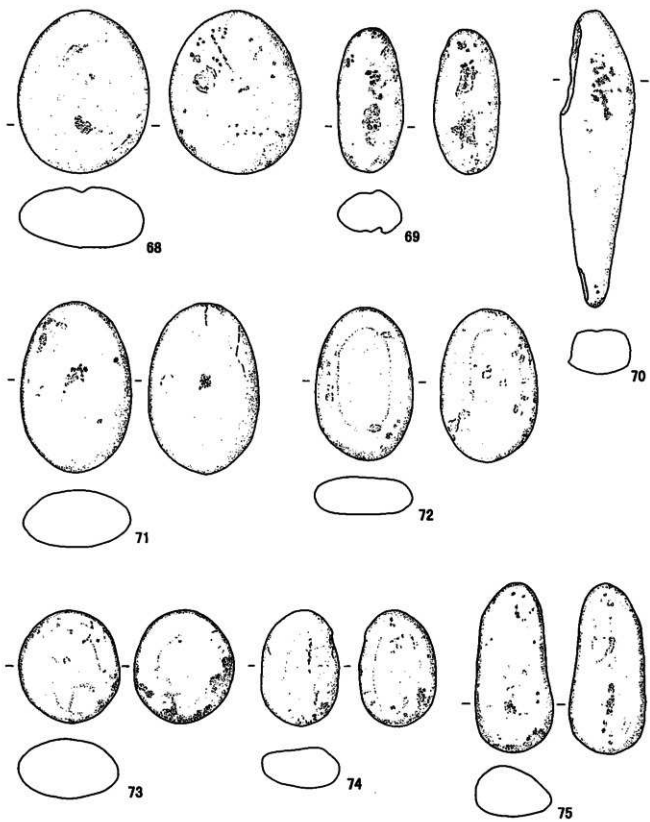
第17図 包含層出土の石器(1)



第18図 包舍層出土の石器(2)



第19図 包含層出土の石器(3)



第20図 包含層出土の石器（4）

安芸遺跡遺物計測表

土 器									
図版No.	出土 地点	層位	分類	計 測 値				材 質	備 考
				口径 長さ(cm)	胴径 幅(cm)	底径 厚さ(cm)	器高(cm) 重さ(g)		
10-1	I-3	Ⅴ	Ⅲ	(20.0)			(9.3)	縄文RL	
2	K-13	Ⅴ	Ⅳb	(28.4)			(20.4)	縄文LR	
3	L-13	Ⅴ	Ⅳb	(25.5)		(10.0)	26.3	縄文LR	
4	F-2	Ⅴ	Ⅳ	(12.3)		6.8	11.3	縄文LR	
5	L-13	Ⅴ	Ⅳ	(38.4)	(39.2)		(24.2)	縄文RL	
6	F-3	Ⅴ	Ⅳ			(7.2)	4.6		
11-7	F-2	Ⅴ	Ⅳ	9.0	12.6	6.4	17.5	縄文LR	
8	F-2	Ⅴ	Ⅳ					口縁部に赤漆	
9	I-3	Ⅴ	Ⅳ	(11.0)			(4.1)		
10	I-3	Ⅴ	Ⅳ	(12.1)		5.0	(7.8)		
11	F-3	Ⅴ	Ⅳ	7.1		2.5	3.7		
12	L-9	Ⅸ	Ⅳc					口縁部 香伊形土器	
13	F-3	Ⅴ	Ⅳe	4.0	13.5	3.5	13.1	縄文LR	
14	F-2	Ⅴ	Ⅳ	注口径 2.1	孔径 1.3	注口長さ 6.9		注口部分	
15	F-3	Ⅴ	Ⅳc	(4.0)	14.6	2.3	13.3	縄文LR	
12-16	L-8	Ⅸ	I					口縁部 縄文LR	
17	I-3	Ⅴ	Ⅱ					口縁部 縄文LR	
18	H-3	Ⅴ	Ⅱ					胴部 縄文LR	
19	K-12	Ⅸ	Ⅱ					胴部 縄文LR	
20	H-3	Ⅴ	Ⅱ					胴部 縄文LR	
21	I-3	Ⅴ	Ⅲ					胴部 縄文LR	
22	M-8	Ⅴ	Ⅳ					口縁部 縄文LR・RL	
23	G-2	Ⅴ	Ⅳb					口縁部 縄文LR	
24	G-2	Ⅴ	Ⅳb					口縁部 縄文RL	
25	F-3	Ⅴ	Ⅳb					口縁部 縄文LR	
26	H-3	Ⅴ	Ⅳb					口縁部 縄文LR	
13-27	G-2	Ⅴ	Ⅳb					口縁部 縄文LR	
28	L-8	Ⅸ	Ⅳb					胴部 縄文LR	
29	H-3	Ⅴ	Ⅳb					胴部 縄文LR	
30	H-3	Ⅴ	Ⅳa					口縁部 縄文LR	
31	H-3	Ⅴ	Ⅳ					口縁部 縄文LR	
32	M-8	Ⅸ	Ⅳf					口縁部 縄文LR・RL	
33	L-9	Ⅸ	Ⅳf					口縁部 縄文RL・LR	
34	L-9	Ⅸ	Ⅳf					口縁部 縄文RL・LR	
35	M-8	Ⅸ	Ⅳd					口縁部 縄文RL・LR	
36	G-2	Ⅴ	Ⅳd					口縁部 縄文LR	
37	M-9	Ⅸ	Ⅳd					口縁部 縄文RL・LR	
38	L-9	Ⅸ	Ⅳd					口縁部	
39	M-9	Ⅸ	Ⅳd					口縁部 縄文LR・RL	
40	K-12	Ⅸ	Ⅳd					口縁部 縄文LR・RL	
41	L-9	Ⅸ	Ⅳ					口縁部	
14-42	M-9	Ⅸ	Ⅳc					口縁部 縄文LR・RL	
43	L-9	Ⅸ	Ⅳc					口縁部 縄文LR・RL	
44	M-9	Ⅸ	Ⅳc					口縁部 縄文RL・LR	
45	L-9	Ⅸ	Ⅳc					口縁部 縄文LR・RL	
46	H-3	Ⅴ	Ⅳc					口縁部	
47	F-3	Ⅴ	Ⅳc					口縁部 縄文RL	
48	G-2	Ⅴ	Ⅳc					口縁部 縄文RL	
49	F-3	Ⅴ	Ⅳc					胴部 縄文LR	
50	F-3	Ⅴ	Ⅳc					胴部 縄文LR	
51	L-9	Ⅸ	Ⅳc					胴部 縄文LR・RL	
52	K-12	Ⅸ	Ⅳc					胴部 縄文LR・RL	

図版No.	出上 地点	層位	分類	計測値				材質	備考
				口径 長さ(cm)	胴径 幅(cm)	底径 厚さ(cm)	器高(cm) 重さ(g)		
14-53	F-3	Ⅶ	Ⅳc					胴部 縄文LR	
54	K-12	Ⅶ	Ⅳc					胴部 縄文LR	
55	L-8	Ⅶ	Ⅳc					胴部 縄文LR	
56	L-9	Ⅶ	Ⅳc					胴部 縄文LR・LR	
57	M-8	Ⅶ	Ⅳc					胴部 縄文LR・RL	
15-58	I-3	Ⅶ	I			9.4	(4.2)	底部 縄文LR	
59	L-8	Ⅶ	Ⅳ			5.6	(6.9)	縄文LR	
60	L-9	Ⅸ	Ⅳ			(5.4)	(3.2)	縄文LR	
61	G-2	Ⅶ	Ⅳ			7.0	(3.6)	縄文LR	
62	H-3	Ⅶ	Ⅳ			6.3	(4.9)	縄文LR	
63	H-3	Ⅶ	Ⅳ					胴部+底部 縄文LR	
64	L-8	Ⅶ	Ⅳ			(11.0)		縄文LR	
65	F-2	Ⅶ	Ⅳ			7.0	(10.7)	縄文LR	
66	K-13	Ⅶ	Ⅳ			10.6	(10.5)	縄文LR	
67	G-2	Ⅶ	Ⅳ			(7.0)	(9.0)	縄文LR	
68	L-9	Ⅶ	Ⅳ			(12.6)	(4.8)		
69	H-3	Ⅶ	Ⅳ			11.2	(7.0)		
70	H-3	Ⅶ	Ⅳ			9.0	(7.0)		
71	H-3	Ⅶ	Ⅳ			6.6	(6.7)		
72	L-9	Ⅶ	Ⅳ			(8.5)	(6.6)		
73	K-12	Ⅶ	Ⅳ			(4.6)	(1.9)		
74	H-3	Ⅶ	Ⅳ			6.3	(7.5)		
75	H-3	Ⅶ	Ⅳ			6.3	(5.5)		
76	L-8	Ⅲ	Ⅳ			6.3	(5.3)		
77	M-8	Ⅲ	Ⅳ			5.8	(5.5)		
土製品									
16-1	L-14	Ⅶ	オロシガネ状土製品	10.5	8.4	1.6			写真7中段
2	K-17	Ⅱ	オロシガネ状土製品	10.7	10.6	1.3			
3	L-14	Ⅶ	オロシガネ状土製品	10.3	7.7	1.0			縄文RL・LR
4	J-15	Ⅱ	オロシガネ状土製品	(7.3)	(3.8)	1.8			縄文RL
5	M-8	Ⅲ	穿孔土製品	5.7	3.5				
6	L-13	Ⅶ	スタンプ状土製品	3.0	3.4	2.6			
7	M-10	Ⅶ	スタンプ状土製品	2.3	2.1	1.9			
8	F-2	Ⅶ	スタンプ状土製品	(6.0)	4.7	4.8			
石器・石製品									
17-1	M-11	Ⅱ	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.5	黒曜石	
2	K-12	Ⅶ	石鏃	1.9	1.5	0.4	0.5	黒曜石	
3	K-12	Ⅶ	石鏃	2.5	1.4	0.4	0.6	黒曜石	
4	L-9	Ⅶ	石鏃	1.9	1.6	0.4	0.8	黒曜石	
5	M-10	Ⅶ	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.6	黒曜石	
6	K-12	Ⅶ	石鏃	2.3	1.5	0.4	0.8	黒曜石	
7	K-12	Ⅶ	石鏃	2.4	1.4	0.4	0.6	黒曜石	
8	K-12	Ⅶ	石鏃	2.3	1.5	0.4	0.6	黒曜石	
9	L-8	Ⅶ	石鏃	3.0	1.4	0.4	0.8	黒曜石	
10	M-11	Ⅱ	石鏃	2.6	1.3	0.6	1.2	黒曜石	
11	M-9	Ⅶ	石鏃	2.6	1.6	0.4	1.1	黒曜石	
12	K-12	Ⅶ	石鏃	(2.7)	1.7	0.4	(0.9)	黒曜石	
13	M-11	Ⅱ	石鏃	(1.8)	2.0	0.3	(0.6)	黒曜石	
14	ZF-H	排土	石鏃	2.7	2.1	0.8	2.4	黒曜石	
15	L-9	Ⅶ	石鏃	2.9	2.0	0.5	1.5	黒曜石	
16	L-8	Ⅶ	石鏃	2.9	2.1	0.6	2.1	黒曜石	
17	L-10	Ⅶ	石鏃	2.2	1.1	0.4	0.7	黒曜石	
18	K-12	Ⅶ	石鏃	1.9	1.1	0.4	0.6	黒曜石	
19	K-12	Ⅶ	石鏃	3.7	1.3	0.4	0.9	黒曜石	
20	K-11	Ⅶ	石鏃	3.6	1.7	0.7	2.5	黒曜石	
21	M-11		石鏃	3.3	1.3	0.6	1.9	チャート	
22	L-8	Ⅶ	石鏃	(2.0)	(1.7)	0.3	(0.6)	黒曜石	

図版No.	出土 地点	層位	分類	計測値				材質	備考
				口径	胴径	底径	器高(cm)		
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
17-23	M-11	II	石鏃	3.9	2.0	0.4	1.8	黒曜石	
24	L-8	VI	石鏃	4.2	2.0	1.1	7.4	黒曜石	
25	K-8	VI	石鏃	4.3	1.6	0.9	4.9	黒曜石	
26	L-13	VI	石槍	6.5	2.2	0.8	11.2	黒曜石	
27	M-10	VI	石槍	(5.8)	3.8	1.5	(24.4)	黒曜石	
28	L-5	II	石槍	6.2	3.6	0.8	9.3	黒曜石	
29	L-8	VI	石槍	6.1	3.2	0.9	10.2	黒曜石	
30	K-12	VI	石槍	(3.5)	2.9	0.7	(5.7)	黒曜石	
31	M-11	II	スクレイパー	6.2	2.9	1.0	14.2	頁岩	
32	L-14	VI	スクレイパー	7.0	3.0	1.2	23.2	チャート	
33	L-5	II	スクレイパー	6.0	3.5	0.8	11.6	黒曜石	
34	L-5	II	スクレイパー	6.0	3.1	0.9	11.2	黒曜石	
35	L-9	VI	スクレイパー	(3.9)	(4.0)	0.9	(11.4)	黒曜石	
36	L-14	VI	スクレイパー	5.1	3.6	1.0	16.6	黒曜石	
37	L-8	VI	スクレイパー	(3.7)	(4.5)	1.1	(9.9)	黒曜石	つまみ付
38	M-11	II	スクレイパー	(4.6)	2.8	0.8	(11.4)	頁岩	つまみ付
18-39	M-11	II	スクレイパー	6.1	5.0	0.8	15.4	黒曜石	つまみ付
40	K-12	IX	スクレイパー	6.4	3.4	1.1	14.0	黒曜石	つまみ付
41	ZF-H	排土	スクレイパー	5.4	2.1	0.5	3.6	頁岩	
42	K-8	VI	スクレイパー	6.3	2.6	0.6	10.0	頁岩	
43	L-8	VI	スクレイパー	4.7	2.7	0.7	7.2	黒曜石	
44	L-13	VI	スクレイパー	8.8	4.3	1.0	27.2	頁岩	
45	ZF-H	排土	スクレイパー	9.8	3.5	1.0	31.0	頁岩	
46	L-13	VI	ドリル	5.3	1.3	0.6	4.4	頁岩	
47	K-8	VI	ドリル	3.0	1.4	0.6	3.9	チャート	
48	L-8	VI	ドリル	3.2	1.0	0.55	1.7	チャート	
49	K-11	VI	ドリル	3.1	2.7	0.6	4.6	チャート	
50	K-14	VI	小形コア	3.1	2.9	1.8	12.6	黒曜石	フレイク集中 (FC)
51	K-14	VI	小形コア	3.6	3.6	1.8	18.8	黒曜石	フレイク集中 (FC)
52	K-14	VI	フレイク	1.9	2.3	1.0	4.2	黒曜石	フレイク集中 (FC)
53	K-14	VI	フレイク	2.4	2.1	1.0	4.3	黒曜石	フレイク集中 (FC)
54	K-14	VI	フレイク	3.4	3.8	1.0	8.5	黒曜石	フレイク集中 (FC)
55	ZF-H	排土	リタツチドフレイク	6.9	7.0	1.8	46.4	頁岩	
56	L-8	IX	北海道式石鏃	13.0	(13.6)	7.6	(1.860)	安山岩	写真8下段
19-57	M-10	III	石斧	(8.3)	4.2	2.2	(114.0)	泥岩	
58	M-4	II	石斧	(12.0)	4.3	2.4	(206.0)	泥岩	
59	L-11	III	石斧	(11.1)	5.2	2.9	(208.0)	ハンレイ岩	
60	J-22	II	石斧	(9.2)	5.0	2.3	(184.0)	泥岩	
61	M-11	II	石斧	(4.5)	5.1	1.1	(43.6)	ハンレイ岩	
62	K-8	VI	石斧	(8.5)	(4.3)	1.2	(55.0)	粘板岩	
63	G-2	VI	石棒	(7.8)	4.0	(1.2)	(53.0)	粘板岩	
64	J-3	VI	石棒	33.2	3.4	3.6	632.0	粘板岩	2点接合
65	J-11	II	石棒	(5.6)	3.6	3.2	(84.5)	凝灰岩	
66	K-8	VI	砥石	(16.3)	(9.3)	6.5	(1.150)	泥岩	
67	L-5	II	砥石	(20.8)	13.0	3.0	(585.0)	砂岩	
20-68	L-9	VI	砥石	13.1	10.5	4.9	933.0	安山岩	
69	M-8	VI	砥石	11.7	5.3	3.5	271.0	安山岩	
70	J-3	VI	砥石	23.8	(5.9)	3.7	713.0	安山岩	
71	M-3	VI	砥石	13.6	8.8	4.6	883.0	安山岩	
72	L-9	VI	擦石	12.2	7.8	3.0	441.0	安山岩	
73	L-9	VI	擦石	9.0	8.0	4.9	520.0	安山岩	
74	L-9	VI	磨石	9.2	6.3	3.2	300.0	泥岩	
75	M-8	VI	擦石・砥石	13.6	6.2	4.1	458.0	安山岩	

第5章 ま と め

余市町内には現在63カ所の遺跡が確認されており、立地として海岸に発達する大川砂丘には縄文時代中期～近世、内陸の黒川砂丘には縄文時代中期～後期、丘陵に縄文時代前期～後期の遺跡が分布する傾向がある。

安芸遺跡については、平成12年度の発掘調査により住居跡や土坑群が発見されており、平成15年度の発掘調査で低湿地から多量な遺物の出土を考えると、この砂丘縁辺には縄文時代中期から後期の集落が点在して分布していた可能性が考えられる。

当時の環境として、安芸遺跡は登川左岸の標高4mほどの黒川砂丘上から低湿地に立地しており、当時の環境としては海岸に沿って細長い大川砂丘の形成が始まり、遺跡の北側は鹹水、または湿地となっていたことが推測される。特に平成15年度の調査区は、低湿地特有の泥炭層となっており、灰色粘土が砂層と相互に堆積しており、倒木や流木が多く見られ浸水が著しい。主体となった遺物は第IV群土器の手稲・ホッケマ式であり、石器、土製品、石製品、木製品など8,000点が出土している。特に木製品として弓、有頭棒、皮なめし、板材、漆製品などから当時の木工技術を知ることができる。

今回の調査は平成15年度の調査区に続くもので、沢としての低湿地部分の中心となっており、遺物の出土状況は湿地部分に集中し、砂丘上ではほとんど出土しない。

注目すべきことは大半が破壊されているが配石遺構が確認されたことである。土坑の確認はないが立石状態であったことから、集落としての何らかの標識としての役割をもっていた可能性が考えられようか。かつてこの砂丘上においても環状列石（ストーンサークル）が発掘されており平地における配石遺構のあることについても考慮しなければならない。

後期の土器群の器形には深鉢、浅鉢、甕、壺、高杯、皿、注口土器と多様である。復元の結果、完形となる土器はほとんどなく、底部のみ、口縁部分、注口のみ欠損しているものが多い。

土製品についてはスタンプ状・オロシガネ状土製品と称される遺物が出土している。

スタンプ面が楕円形を呈し幾何学的な刻文状の沈線が見られるもので儀礼的なことと関連すると思われる。この土製品の用途であるが深い沈線で模様は施され、つまみ状であることからスタンプとして使用されていたものと思われ、渡辺誠氏によれば民俗事例、遺物としてのクッキー状炭化物などから、トチやドングリの粉で作った餅にスタンプを押し、神聖な祭りの場や成人式・結婚式などに食べたのではないかと推定している。また、身体装飾にもスタンプとして使用していたかもしれない。オロシガネ状土製品も同時期に存在しており、一対として使用されている可能性がある。

石器については破損品が少なく、石鏃、石槍が多く、縦長剥片を利用して基部にくびれを持つ剥片石器の石製ナイフ（石匙）がわずかに見られるもので、定型的な石器は少ない。

礫石器では、握り拳大の扁平な礫を敲石として使用しているもので、従前の調査でも多

量に出土しており、この遺跡の特徴となっている。

先端部分のみの石棒が1点出土しており、小破損で廃棄されていることは希有なことであり、儀礼後に破壊している可能性がある。周辺の遺跡として南東約500mにある標高約30mの舌状台地には縄文時代後期と推定される八幡山環状列石（ストーンサークル）があり、その付近からは完形の石棒が出土しており、関連する可能性が高い。

3カ年の発掘調査を通して砂丘上と低湿地との関連が明るみになってきたことは大きな成果である。黒川砂丘上には縄文時代中期の集落が多く営まれたが、後期になると集落が点在する傾向となっている。その要因はよくわからないが、環状列石（ストーンサークル）の出現、儀礼的遺物の流行と関連していることは予測されるところである。

安芸遺跡を例にするならば砂丘の発達している岸辺には、焼土や貯蔵坑が見られることから集落が形成され、配石遺構も作られるようになり、低湿地は水の供給源としても重要であり、器物の破損した物や儀礼に使用された物などが廃棄される場所であった。

また、森林に恵まれていたこともあり、狩猟としての弓、樹木伐採のための石斧の柄、食材を盛るための器、儀礼的な有頭棒、鮭などの皮なめし、漆製品として黒色漆塗や赤系糸玉、建材として貫を有する板材、杭などの木製品などが生活の中で使用されている。

当遺跡の類例として、小樽市忍路環状列石（ストーンサークル）に近隣する忍路土場遺跡がある。低湿地遺跡であることから、土器、石器、土製品とともに多量の木製品が見られ、時期的にもほぼ並行しているため、比較、検討が可能である。この遺跡では土器群の層位的変遷から器形や文様が漸移的に変化していく様子が確認されている。また弓、建材・構造材、樹皮製品、漆製品など多量の木製品の出土から高度な木材の加工技術の存在が知られていたが、安芸遺跡の発掘調査により縄文時代後期の社会が予想以上に木の文化であったことが追認され、改めて縄文社会の復元に欠くことのできない重要な遺跡であることが理解できた。

今後は安芸遺跡を含めた縄文時代後期、環状列石（ストーンサークル）の作られた社会と文化の解明が必要と思われる。

【引用・参考文献：50音順】

- 乾 芳宏 2000「八幡山ストーンサークルについて」『余市水産博物館研究報告』3
- 上杉 陽他 1973「石狩海岸の平野と土壌について」『第四紀研究』12-3
- 大沼忠春 1981「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』66-4
- 大沼忠春 1989「北筒式土器様式」『縄文土器大成』4
- 大丸裕武 1989「完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程」『地理学評論』62
- 小樽市教育委員会 1994『豊井浜遺跡』
- 小樽市教育委員会 1999『忍路環状列石』
- 小樽市教育委員会 1999『塩谷6遺跡』VI
- 小樽市教育委員会 2001『忍路環状列石』II
- 加藤邦雄 1976「縄文時代後期・晩期」『北海道考古学講座』
- 壹野 茂 1978『アイヌの民具』
- 北日本新聞社 1997『小矢部桜町遺跡』
- 木村方一 1980「砂丘と古砂丘」『北海道5万年史』
- 工藤善通他 1994『先史時代の木工文化～季刊考古学』47
- 久保武夫 1966「余市海岸の砂丘」『余市高校研究紀要』2
- 桑原 護 1966「北筒式土器」『考古学雑誌』51-4
- 桑原 護 1968「余市式土器」『考古学雑誌』54-1
- 児玉作左衛門他 1952「禮文島船泊砂丘遺跡の発掘に就いて」『北方文化研究報告』7
- 駒井和愛 1959『音江』
- 札幌郡手稲町教育委員会 1956『手稲遺跡』
- 佐藤利雄 1977「余市町登川丘陵より出土の石棒について」『北海道考古学』13
- 鈴木克彦 1999「北海道渡島・檜山地域の後期前～中葉の編年」『国学院大学考古学資料館紀要』15
- 鈴木公雄 1988「漆を使いこなした縄文人」『古代史復元2 縄文人の生活と文化』
- 高橋 理 1996「余市式再考」『北海道考古学』32
- 鷹野光行 1978「北海道における縄文時代後期中葉の土器の編年について」『考古学雑誌』63-4
- 当別町教育委員会 1970『伊達山遺跡』
- 名取武光他 1969「縄文後期文化」『新版考古学講座』3
- 北海道開拓記念館 1998『うるし文化—漆器が語る北海道の歴史』第47回特別展図録
- 北海道開拓記念館 2000『先史文化と木の利用—遺跡からのメッセージ』第50回特別展図録
- 北海道教育委員会 1989『美沢川流域の遺跡群』I

- 北海道教育委員会 1990『美沢川流域の遺跡群』Ⅱ
 北海道埋蔵文化財センター 1991『美沢川流域の遺跡群』Ⅲ
 北海道埋蔵文化財センター 1989『忍路土場遺跡・忍路5遺跡』
 北海道埋蔵文化財センター 2000『西崎山ストーンサークル』
 町田 洋他 1986『地層の知識～考古学シリーズ』8
 松前町教育委員会 1974『大津遺跡発掘調査報告書』
 宮 宏明 1988「スタンプ状土製品に関する若干の問題」『北海道考古学』24
 森田知忠 1981「北海道縄文後期の土器」『縄文土器大成』3
 八雲町教育委員会 1992『コクン温泉遺跡』
 山田悟郎他 1992「積丹半島の第4紀系について」『北海道開拓記念館研究報告』12
 山田昌久 1995「木製品」『縄文文化の研究7-道具と技術』
 余市町教育委員会 1965『西崎山』
 余市町教育委員会 1971「總括」『天内山』

この中で黒川砂丘上の配石遺構についてふれている。

- 余市町教育委員会 1988『大谷地貝塚』
 余市町教育委員会 1988『登川右岸遺跡』
 余市町教育委員会 2000『大川遺跡における考古学的調査』Ⅱ
 余市町教育委員会 2001『大川遺跡における考古学的調査』Ⅲ
 余市町教育委員会 2002『安芸遺跡』
 余市町教育委員会 2003『安芸遺跡』
 余市町登町区会 1986「登町の先史時代」『登郷土史』
 吉崎昌一 1965「北海道 縄文文化の発展と地域性」『日本の考古学』Ⅱ
 礼文町教育委員会 2000『船泊遺跡発掘調査報告書』
 渡辺 誠 1984『縄文時代の植物食』
 渡辺 誠 1988「スタンプ形土製品について」『Shell Mound』3

写 真 图 版



発掘前の状況（北西方向より）



発掘前の状況（南方向より）



低湿地の浸水状況（北西方向より）



低湿地の調査状況（西方向より）



小学生による発掘体験学習（北方向より）



遺物の出土状況（東方向より）



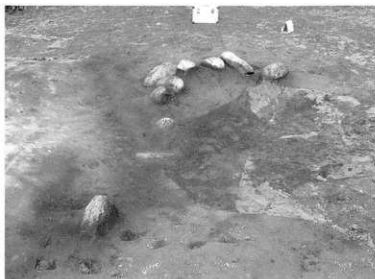
土層断面（西方向より）



完掘状況（南方向より）



低湿地の完掘状況
（北方向より）



配石遺構（南方向より）



配石遺構（東方向より）



配石遺構（北方向より）



集石遺構の発掘状況
(北西方向より)



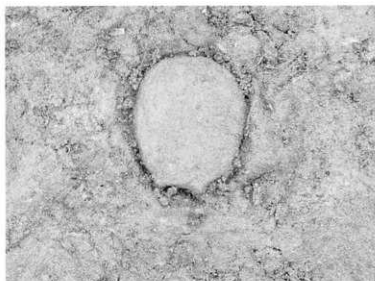
集石遺構の出土状況
(東方向より)



集石遺構の出土状況
(東方向より)



遺物(第IV群土器)の出土状況



遺物(土製品)の出土状況



遺物(第IV群土器)の出土状況



遺物(第IV群土器)の出土状況



遺物(石棒破片)の出土状況



遺物(北海道式石冠)の出土状況

報告書抄録

ふりがな	あきいせき							
書名	安芸遺跡							
副書名	余市町黒川第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	乾 芳宏							
編集機関	北海道余市郡余市町教育委員会							
所在地	〒046-0015 北海道余市郡余市町朝日町26番地 TEL0135-21-2111							
発行年月日	西暦2007年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
安芸遺跡	北海道 余市郡 余市町 黒川町	0148	D-19-19	43° 11'	143° 49'	2005 7.1 ～ 11.19	900 ㎡	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
安芸遺跡	包蔵地	縄文時代	配石遺構	土器 石器 土製品 石製品		縄文時代後期の遺物が 多数発見された。		

安 芸 遺 跡

余市町黒川第一土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成19年3月28日

発 行 余市町黒川第一土地区画整理組合
〒046-0003
北海道余市郡余市町黒川町425番地1

印 刷 (有)商工社 久留宮印刷
北海道余市郡余市町大川町4丁目98番地
